

## ～ ひかり探Qプロジェクト ～

### テーマ 「光市に魅力ある“体験”で人をもっと呼びたい！」

山口県立徳山商工高等学校 2年 寺田悠真

山口県立岩国工業高等学校 2年 田中光己

#### (1) プロジェクトの動機と想い

私たちがこのプロジェクトを立ち上げた動機は、「光市の魅力を市内外の人に知ってほしい」、また「光市の魅力を別の視点で考えてみたい」、さらに「光市を盛り上げたい」という3つの想いからである。

取組の方向としては、光市の自然が大好きなので、自然をメインとして探究を行い、さらに体験型だと人が集まれそうだと考え、プロジェクトテーマを「光市に魅力ある“体験”で人をもっと呼びたい！」と設定した。



#### 動機

光市の魅力を市内外に知ってほしい!!

光市の魅力を別の視点で考えてみたい!

光市を盛り上げたい!

#### (2) 光市の現状を知る

活動の最初は、光市にはどんな魅力があり、またどのような課題があるのか現状が分からなかったもので、光市役所の人や地元で起業された経営者の人などと話しながら、光市の魅力について探っていくこととした。

具体的には、本プロジェクトの活動拠点としている市内 coworking space において、二日間に分け、行政の立場から光市役所広報・シティプロモーション推進室の方、そして民間の立場から光市で IT 関係の会社を運営されている方をお招きして、本プロジェクトの探究サポーターである光市教育委員会関係の方々と一緒に語り合った。

#### 取り組みの方向

- ・自然が大好き!  
→自然をメインに魅力を探究!!
- ・体験型だと人が集まりそう!?



テーマ

「光市に魅力ある“体験”で人をもっと呼びたい！」

#### (3) 見えてきた光市の魅力と課題

話を伺いながら、光市の自然に関する魅力に、どんなものがあるかについては、右スライドに示すような市内各地の美しい景色等が挙げられた。

また、広報・シティプロモーション推進室の方からは、景色以外にも食・歴史・産業・観光・体験など四季それぞれに色々な魅力があることを伺った。



さらに、過日、自分が光市企画『まちの「光」認識・発見ツアー』（市内鉄工所）のボランティア運営サポーターとして参加したとき、イベントへの参加者が想像以上に多かったことや各参加者の関心度の高さに驚かされたことは、光市の魅力についての新たな発見であった。

次に、見えてきた課題に関しては、IT関係の会社を経営されている方から、観光資源や名産品・イベントなどは多くあるけれど、それがうまく使えていないのでは…。広報・シティプロモーション推進室の方からは、市の魅力はあるけれども、それが点になって、線でつながっていないのでは…、といったお話も伺った。

#### どんな課題??

- 光市でIT関係の会社を経営されている方  
・観光資源や、名産品、イベントなど多くあるが…  
→うまく使えていない
- 広報・シティプロモーション推進室の方  
・市の魅力が点になっている  
→線でつながるといい…

## (4) 目指すゴールの確認

プロジェクトテーマを「光市に魅力ある“体験”で人をもっと呼びたい!」と設定して、光市の現状を把握し、その魅力と課題を探る中で、このプロジェクトの具体的な「目指すゴールはどうか?」についても話し合いを重ねた。

その結果、「最終的には光市に魅力を感じて『住み続けてもらう』」ということを目指すゴールとした。

#### 具体的にどこを目指す?

テーマ  
「光市に魅力ある“体験”で人をもっと呼びたい」

↓

最終的には魅力を感じて「住み続ける」光市に!

## (5) ゴールを目指すにあたっての問い

さらに、テーマ「光市に魅力ある“体験”で人をもっと呼びたい」について、キーワードである「魅力ある“体験”」とは、どんな体験だろうか、言い換えると「『また体験しにきたい!』と思ってもらえるような体験って何?」という問いが生まれた。

この問いに対し、私たちの話し合いの中では、これは「旬」と呼べるような体験ではないかという結論に達し、「旬」を「その時・その場だからこそできる唯一の体験」と位置づけた。例えば、花火大会とかは、まさに「旬」であり、その時・その場の夏の風物詩といえる。

こうして、本プロジェクトは、光市の「旬」と呼べる体験をベースに展開することとし、さらに、四季折々の「旬」の中でも、特に私たちが大好きな光市の自然である「『海』を舞台に」この探究活動を行うことにした。

#### 新たな問い

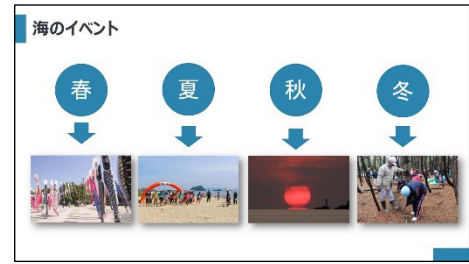
“体験”  
…「また“体験”しにきたい!」と思える体験とは?

#### 仮説

「旬」= その時、その場所だからこそできる体験! ?

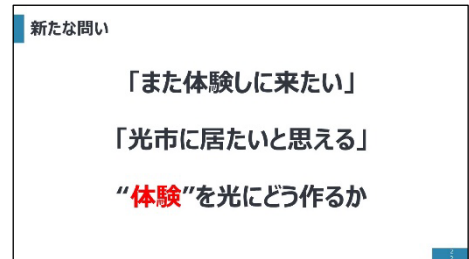


そこで、光市の海を舞台にした「旬」について調べると、右スライドのように、春・夏・秋・冬、いろいろあることがわかった。しかし、これらのイベントや自然現象は、その時・その場にある程度人は集まるけれども、一時的なものであり、これだけでは私たちが目指すゴール「住み続けてもらうような光市」にはつながらないように感じられ、さらに良い方法はないかアイデアを巡らした。



## (6) 新たな問いと「旬」のかけ算

一時的な人の集まりに終わらせない方策を考えていると、これまでの問い「『また体験しにきたい』体験とは？」に加え、さらにステップアップして「『光市に居たいと思える』体験をどう作るか？」という新たな問いが生まれた。

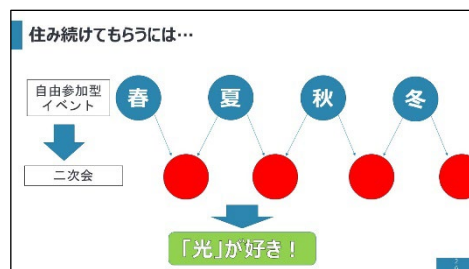


これら二つの問いを総合的に考えながら、プロジェクトでお世話になっている皆さんと一緒に、探究の深堀を重ねた。そして、考え出したのが、その場・その時の「旬」と「魅力ある体験」をうまく掛け合わせる、つまり「旬」と「魅力ある体験」の“かけ算”を通して新たな価値づけを行い、「住み続けたい光市」を目指そうというものである。

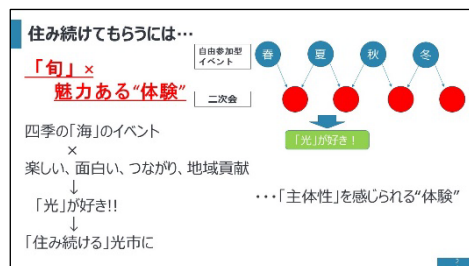


## (7) やってみたいこと「二次会」

「旬」の“かけ算”を想定した図が、右のスライドである。四季それぞれに「旬」のイベント等体験（青まる）があり、現状はそこで終わっている状態である。そこで、この人の集まりを機会として、スライドに示す「二次会」（赤まる）的な第2の企画（やりたい体験）を設定することによって、同じ気持ちを抱く人が集まり、さらに魅力ある体験を仕組み、重ねることによって、定期的な新たな人の集まりを生み出せるのではないだろうか。



具体的には、本プロジェクトの舞台である「四季の海のイベント『旬』」に対して「楽しい・面白そう、つながりや地域貢献等、主体性を感じられる体験」を「二次会」として設定し、その中で、集まった人が、さらにやりたいことを自由な発想で、体験



やボランティア、仕事などを通して、光市への魅力が高まり、ずっとやり続けたいとか、

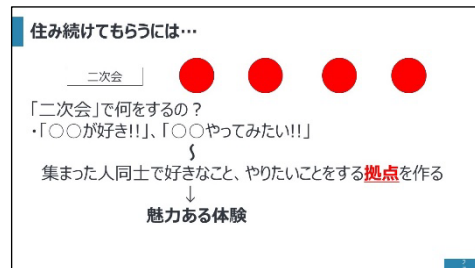
ここにずっと居続けたいといった気持ちが芽生えることを期待するものである。

## (8) 拠点づくり

さらに、活動を行うにあたっては、「拠点」のようなものがあると、やりたい体験につながるのではないかと考えた。

「二次会」を行う場として、ある程度決まった「拠点」があると、そこに人が集まりやすく、その「拠点」の特性に応じた活発的な活動の展開が期待される。

例えば、市内数か所にあるキャンプ場や仕事も同時にできるコワーキングスペース、さらには改修作業も兼ねた海辺の空き家なども考えられるが、今後、いろいろな関係者と相談しながら進めたいと思う。



## (9) 今後の取組

今後の取組としては、光市を好きになってもらうようにと私たちが考えたこの構想を、光市役所の広報・シティプロモーション推進室の方等に提案して、一緒にもっと深めたいと思う。

そして、活動の「拠点」について、その他にどのような所が考えられ具体化できるか、もっと詳しい人に聞いてみたいと考える。

また、これからも光市に魅力ある“体験”で人をもっと呼ぶプロジェクトの探究を通して、具体的なアクションを起こしていきたいと思う。

## (10) プロジェクト全体を振り返って

- 多くの人と協力して、改めて光市の魅力や体験等について考えることができた。
- 県外等から来た人に言える光市の唯一の魅力について、すぐ分かるようなものを、まだ見つけていないので、「かけ算」をしなくても伝わる光市そのものの魅力の発見・発信も必要と感じた。
- 今回の探究活動を通して、いろいろな方とのつながりが得られたことは、自分の人生において大きな糧になったと思う。
- 活動全体を通して、最初はゴールがぼんやりとしていたが、まだ実現はできていないものの、かなり形になってきた。自分たちの思いが形になり、その中で「かけ算」という新たな提案が生まれたことがよかった。



## 4 「やまぐち探究サミット」に参加して

### (1) 感想

- ・ 他の発表で、地域を巻き込み、地域ぐるみで取り組んでいる事例が参考になった。
- ・ 最初から大きな規模でやらず、少しずつ大きくしていくという手段もあることが分かった。
- ・ 周南公立大学の講師(ファシリテータ)の方が、ゼミの生徒を連れて虹ヶ浜海岸を訪れたとのことで、市・県外の大学生が、光の海に興味があることを知った。
- ・ この発表会そのものが、みんな(参加者)で学び合うような雰囲気があり、とてもよかった。
- ・ 周囲を巻き込む力や主体性が結構大事なのかもしれないと感じるとともに、仲間の存在が大きいと思った。

### (2) サポーター(評価者2名)の方からの意見等

【 山口大学理事・副学長(地域連携担当)、株式会社豆子郎代表取締役社長 】

- ・ 自分たち(10~20代)の世代の人たちを呼ぶ必要があるから、まずは自分たちがやってみたいと思うことを進めることが大切である。
- ・ 自分たちが光市に住んでいて気づかないことがたくさんある。しかし、それが他の地域の人からみると貴重、レアなものとなる場合がある。
- ・ 今は、「もの」づくり→「こと」づくりにシフトしてきている。県もそれを進めている。
- ・ 今いる光市民が市外に出ていかないように、まずは市内の人に取組を発信する。そうすると、市内で、今やっているような取組が好きな人が参加し、市内外に発信してくれる。まずは、市内を固めてから市外に出る方向がよいのではないだろうか。

### (3) 今後の取組の方向性

- ・ 「かけ算」の考え方はこれからも引継ぎ、ターゲットにする年齢層を自分たちぐらいの世代を中心にして探究を進めていきたい。
- ・ 市内に居て気づかないことも多くあると思うので、市外の人に光市の魅力について聞いてみたい。
- ・ 外から見た光市を知った後、市内について今一度探究を深めるために、これまでお世話になっている市役所の方やIT関係の社長さんなどと話して、どんな「かけ算」をするかを考えたい。
- ・ 公共の機関や施設とコラボしながら「かけ算」を通して、より多くの人が目にとまるような場所で活動できるとよいと思う。
- ・ より多くの人(同年代、大人の方と共に)と光市について、探究を深めていきたい。